

なぜ校歌は踊られるのか

—宮古島における国民化と地域化の間で—

山梨 雅枝*

長見 真** 藪 耕太郎***

抄録

宮古島の校歌遊戯は、小学校や中学校の各学校固有の校歌に合わせて旗をもって踊る集団遊戯であり、運動会で体育学習の成果として発表されている。

そもそも、校歌遊戯は宮古島だけで踊られるものではない。しかし、戦前から現在に至るまで継続し、かつ市全域で踊られているという事実は他に類を見ない事例と言える。

校歌遊戯で用いられている校歌誕生の背景には、明治期の近代国民国家形成と大きな関わりがあり、明治政府は西洋文化との接触のなかで、西洋の音楽を国民づくりのためのツールとして導入した経緯がある。それは、芸術性などとは何の関りもない唱歌であり、教育唱歌の1つとして各学校の理念を表した校歌が誕生した。

また、政府は唱歌に踊りを加えた唱歌遊戯なるものも誕生させ、この唱歌遊戯が学校独自のかたちとして校歌遊戯を生み出したと考えられる。

宮古島において校歌遊戯で使用する旗が日章旗や旭日旗であった時代もあり、このことは「琉球人ではなく日本人である」というイデオロギーを植え付けるための政策的な手法であった。しかし、現在では市旗と校旗をもって踊られることが一般的である。

校旗は、1939年（昭和14年）5月22日に行われた天皇親閲式に参加するために校旗を制定した学校がほとんどであった。

国民形成手段の場として学校を必要とするからには、学区という地域の枠組みを無視することはできない。地域の中で培われた連帯感や団結力の方向性を国家に向けることで、近代国民国家を実現させようとしたのではないだろうか。

国民形成を図るための校歌遊戯を実施することで、かえって近接地域との差異が浮き彫りになり、その地域のアイデンティティを育てていったとみていだろう。

宮古島の校歌遊戯は学校を卒業した後、主に成人式や結婚式、同窓会や還暦のお祝いといった場で、かつての学友や卒業生と集う時に踊られている。

宮古島は、離島という地理的条件だからこそ地域との関りは密接にならざるを得ない。

そして、宮古島の校歌遊戯が地域アイデンティティ形成に寄与できたのも、全国に流布されている唱歌（政府から配布された唱歌集収録のもの）でなく、生まれ育った地域の自然や風土がふんだんに盛り込まれた校歌である点が挙げられる。

キーワード：校歌遊戯、運動会、校歌、校旗

* 仙台大学体育学部 〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

** 帝京科学大学教育人間科学部 〒120-0045 東京都足立区千住桜木 2-2-1

*** 仙台大学体育学部 〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

Why is the school song danced ?

—The school song dance between nationalization and localization in Miyakojima Island—

Masae Yamanashi*

Makoto Nagami** Kotaro Yabu***

Abstract

The *Koka-Yugi* of Miyakojima is a group dance performed by students at each elementary and junior high school in the city. While students hold and wave a flag in each hand, they dance to their individual school songs.

The history of these school songs began in Japan's Meiji period. School songs were deemed significant in Japan's drive to become a modern nation-state during that period. School songs were created as one type of educational song; they expressed the ideals and beliefs of each school.

By creating dances to accompany the songs, the national government fostered the birth of the song-dance tradition (*Shoka-Yugi*). Adapting these songs to individual schools is thought to have led to the birth of the *Koka-Yugi*, the school song-with-dance.

While the performance of *Koka-Yugi* was intended to foster a national identity, the differences between the nation of Japan and the local area of the Miyakojima people became readily apparent. The result was that the song-dance then began to foster local identity.

Koka-Yugi continues to be danced by local people even after they have graduated from school.

The school songs that sing of local nature and customs of Miyakojima are at the heart of *Koka-Yugi* and not the "official" songs that were disseminated nationwide (in song collections distributed by the national government).

Key Words : school song dance, sports day, school song, school flag

* Sendai University Faculty of Sport Science 2-2-18 Funaokaminami, Shibata-machi, Miyagi-ken 989-1693 Japan

**Teikyo University of Science Faculty of Education & Human Science 2-2-1 Senjusakuragi, Adati-ku, Tokyo-to 120-0045 Japan

***Sendai University Faculty of Sport Science 2-2-18 Funaokaminami, Shibata-machi, Miyagi-ken 989-1693 Japan

1. はじめに

本研究は、校歌遊戯が国民化の装置として機能した点と、地域アイデンティティ形成ツールとして機能するという2つの作用について、宮古島の事例について着目した。そもそも校歌遊戯は、小学校や中学校の各学校固有の校歌に合わせて旗をもって踊る集団遊戯であり、現在では宮古島の小・中学校で校旗と市旗を持って踊られるが、戦前や戦後間もなくには国旗を持って踊られていたこともあった。校歌遊戯には複雑なステップや隊形変化はなく、縦隊で踊られている。振付に多少の差はあるが、宮古島の校歌遊戯のほとんどがこのスタイルで踊られている。宮古島の校歌遊戯の設定については、1921年（大正10年）に、小学校の運動会で校歌遊戯が披露されたという記録があるだけで（北小学校）、初めて校歌遊戯が作られた明確な時期については明らかになっていない。現在、校歌遊戯は体育の授業などで学び、運動会で学習の成果として発表されている。その振付は、当時の教員や生徒によって振付けられたものを変更されることなく当初のまま継承されている。

校歌遊戯は宮古島市だけで踊られるものではない。しかし、戦前から現在に至るまで継続し、かつ市全域で踊られているという事実は他に類を見ない事例と言える。

2. 目的

宮古島の校歌遊戯は、明治期の近代国民国家形成の手段として教育現場で実践された様々な要素の集合体として成立したと考えられる。しかし、国民づくりが達成された後も宮古島においては、校歌遊戯が継続して実施され現在に至っている。このように、国家の政策の過程で校歌遊戯がなぜ誕生していったのか、校歌や遊戯、旗に注目して検討したい。また、この政策としての校歌遊戯がなぜ現代に至るまで継続して実施されているのかについて検討したい。

3. 方法

本研究は、宮古島市の公立中学校教頭である那覇周作氏の協力を得て、宮古島市内の小・中学校の卒業アルバムや記念誌、宮古島全土の小学校・中学校の運動会での実施種目を収集した。

また、琉球大学付属図書館、宮古島市城辺図書館及び宮古島市役所において、戦後から昭和の終わりまでの新聞や教育組織が発行する新聞や季刊誌、広報誌、宮古島の市史や町史において、校歌遊戯はもちろんの

こと、運動会や旗、校歌、クイチャーに関する記事について閲覧が可能であった文献に関しては、すべて確認した。

また、宮古毎日新聞社の協力を得て、市民より校歌遊戯の情報を収集した。

4. 結果及び考察

校歌遊戯がいつごろから導入され、旗が国旗から校旗と市旗に変更された具体的な時期に関して学校のアルバム等から探ろうと試みたが、宮古島市の小・中学校でのアルバムの保存やアルバムの作成を実施していない学校がほとんどであった。加えて、他の文献においても、校歌遊戯の成り立ちについて具体的に記された資料は所見の限り見当たらなかった。また、市民への聞き取りにおいても校歌遊戯と手旗体操の記憶が混在しており、具体的な事実について確認することができなかった。

しかし、政策的な意味を失った現在においても市内全域の小・中学校においては、継続的に校歌遊戯が実践されている事実を確認することができた。

そして、この事実は校歌遊戯の意味が単に国民化への政策ではなく、地域化へのツールとして読み解くことができた。

4.1. 唱歌としての校歌

現在、日本の小・中・高校のほとんどに固有の校歌が制定されている。

この校歌が制定された背景には、明治期の近代国家形成と大きな関りがあり、明治期においては西洋音楽授業が近代教育政策の必須事項であった。

そして、明治政府は西洋文化との接触のなかで、西洋の音楽を国民づくりのためのツールとして導入した。それは、芸術性などとは何の関りもない唱歌であった。唱歌は、1つの共同体メンバーがそれにふさわしい健全な肉体や精神を共有するための不可欠のツールとして編み出された。

そして、唱歌は学校において道徳の涵養や標準語の獲得がねらいとして一斉に実施された（三島, p. 68）。

この教育唱歌の1つとして各学校の理念を表した校歌が誕生した。校歌は、画一的な国民道徳を示す他の唱歌とは違い、歌詞にはその地域の自然や風土を示す内容が多く採用されたのである。

また、政府は唱歌に踊りを加えた唱歌遊戯なるものも誕生させた。なぜならば、国民づくりの一環として身体づくりも重視したからである。つまり、道徳や標準語の獲得として導入された唱歌に振りをつけて演

ずる遊戯の導入を試みたのだ。この試みもまた唱歌と同様に、学校教育の中で実施された。

この政策の施行範囲は日本全土であり、当然沖縄県も日本国民へ改良する対象になった。そして、琉球人を日本人に改造していくためには、教育が最重要手段だったのである。

この文脈のなかで宮古島においても国民形成の手段であった唱歌遊戯としての校歌遊戯が受容されていったことは当然といえる。そして、校歌遊戯では自分たちの所属先を示す旗を持って踊られている。かつては、国旗を持って踊られていたようだが、現在では校旗と市旗をもって踊られている。この校旗がどのような経緯で制定されたのか、次節で述べたい。



1980年3月平一小学校「想い出」

4.2. 校旗の制定

校旗は学校が創立したと同時に制定されたのではなく、1939年（昭和14年）5月22日に行われた天皇親閲式に参加するために校旗を制定した学校がほとんどであった。

親閲式では、日中戦争の長期化が予想されたために、国家総動員体制を構築する必要性から、文部・陸軍・海軍の3省共催の陸軍現役将校学校配属令交付15年記念の合同査閲を実施した。そこで天皇は、全国から校旗を掲げて上京した学生・生徒代表の大分行列を親閲し、その校旗には親閲拝受賞が与えられた。親閲拝受賞をつけて学校に戻った校旗は、各段の権威をもつことになり、この頃から学校団結の核として校旗があるものは当たり前とする思想が一般化していった（水崎, p. 15）。学生・生徒たちはそれまでの御真影・教育勅語への最敬礼に加えて校旗への敬礼を一律に身体化させられていくが、戦後は御真影・教育勅語への最敬礼の廃止と共に校旗がもっていた権威は消滅していき、学校を象徴するものとして学校の式典や全国のスポーツ大会に出場するときなどに使用されるようになったのである。

校歌遊戯は、国民道徳や言語統一機能をねらいとした唱歌としての校歌と、身体づくりとしての遊戯、さ

らには帰属意識や連帯感を強める装置としての旗という、3点が見事に結合したかたちで学校教育の中で実践されたと考えられる。

詳しい事実については確認できていないが、校歌遊戯は、日本各地で行われていたようである。特に長野県の一部の部落では、校歌遊戯を実践していたという事実があるが、宮古島のように全地域で継続的に実施されている事実は、特例と言える。

では、なぜ現代に至るまで宮古島では校歌遊戯が継続して実施されているのか。それには、戦後の国民形成手段としての役割と地域アイデンティティ形成のツールとしての役割という二重性にあると考えられる。

5. まとめ

ここで注目したい点は、日本国民形成という大きな枠組みを実現させるために地域という小さな枠組みの形成を必要とした点である。それは、国民形成手段の場として学校を必要とするからには、学区という地域の枠組みを無視することはできないからである。学校教育という現場においては、地域の中で培われた連帯感や団結力の方向性を国家に向けることで近代国民国家を実現させようとしたのだ。

つまり宮古島の校歌遊戯は、単に国民形成のツールとして試作されたものが、時代の変化とともに意味を読み替えられてきた結果として、現在でも宮古島全域で実践されているというものではない。むしろ、国民形成を図るための校歌遊戯を実施することで、かえって近接地域との差異が浮き彫りになり、その地域のアイデンティティを育む結果となったとみるべきであろう。

校歌遊戯が就学期に学習の成果としてのみ踊られるものであれば、それは単なる教材に過ぎない。しかし、宮古島の校歌遊戯は学校を卒業した後にも踊られているのである。

それは、主に成人式や結婚式、同窓会や還暦のお祝いや郷友会の大運動会などであり、かつての学友や地域の人たちと集う時である。



1999年10月30日平一校・平南中昭和初亥子会

宮古島は、人口 55,000 人程度の離島であり、進学や就職、結婚によって地元を離れて生活せざるを得ない状況がある。そういった中で、校歌遊戯は地元の仲間に出会った時、共通言語として機能する。また、初めて会った相手でも同じ校歌遊戯が踊れるということで、その地域で生まれ育った証ともなるのである。

このように学校を卒業した人びとによって校歌遊戯が踊られる場合、回顧的な側面と地域という共同体意識が混在するものとして機能する。

宮古島は、離島という地理的条件だからこそ地域との関りは密接にならざるを得ない。

そして、宮古島の校歌遊戯が地域アイデンティティ形成に寄与できたのも、全国に流布されている唱歌(政府から配布された唱歌集収蔵のもの)でなく、生まれ育った地域の自然や風土がふんだんに盛り込まれた校歌である点が挙げられる。

宮古島における地域とは疑似家族であり、そんな仲間と歌い、踊るという人間の根源的な喜びを発揮できるツールとして、学校行事としての運動会を離れても校歌遊戯が踊られていると考えられる。

【参考文献】

〈書籍〉

小禄恵良 (1989) 『宮古体育スポーツ 百年の歩み』 宮原 企画

小禄恵良 (2017) 『改定 栄光の系譜』 布千堂歴史資料館

富山一郎, 森 宣雄 (2010) 『現代沖縄の歴史経験 希望、あるいは未決性について』 青弓社

三島わかな (2014) 『近代沖縄の洋楽受容』 森話社

水崎雄文 (2004) 『校旗の誕生』 青弓社

屋良朝苗 (1968) 『沖縄教職員会 16 年 祖国復帰と日本国民としての教育をめざして』 労働旬報社

渡辺裕 (210) 『歌う国民』 中公新書

〈その他〉

北小学校創立百年記念事業期成会 (1983) 『北小学校百年』: 113.

小禄恵良 『宮古島民謡の先師・友利明令に捧ぐ 芸能の系譜 第4巻』

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。